「おにぃちゃん、おはよう。」

【中学生の部】〇最優秀賞

「 近所の小学五年生の子に教わった」

毎朝会う度に声をかけてくれるのは、近所に住む小学校五年生の男の子です。朝から元気いっぱい笑顔なあいさつで僕も自然と笑顔になります。男の子はどんどん話しかけてくれます。

「おにぃちゃん、なまえは？」

「すきなたべものは？」

「このリュック、なにはいってるの？」

僕はひとつずつ答えていきます。ゆっくり、笑顔で、聞こえやすい声で答えます。しかし実は、この会話は前の日も、その前の日も、その前の日もしているのです。多分、前日の情報のほとんどが記憶に残ってないのでしょう。男の子はそのような障害をもっているのです。この男の子は僕が初めて会った「障害者」という存在で、僕の考え方を変えてくれたのです。

　僕が初めて男の子としゃべったのは、僕が小学六年生のときです。地区が同じなので、ラジオ体操や祭りの時間を伝えようとしました。僕が話すと男の子は何か言ってきました。それは本当に何かであって、文としては全然理解できませんでした。僕はそのとき、「障害者は大変だなぁ」としか思いませんでした。その後も何度かしゃべったけど、どうすればいいのか分かりませんでした。

射水市立小杉中学校　三年

　そんなある日、地域共生社会についてという講演会に参加しました。その理由は、障害をもつ人との関わり方を学びたかったからです。この講演会で特に印象に残ったのは「聴く」ということです。「聴」という漢字には、耳・目・心という字が使われています。また、人は口が一つで耳は二つあります。つまり、自分が話す倍だけ他人の話を、目と耳と心を使って聴かなければいけないのだそうです。これを聞いて振り返ってみると、僕は男の子の話の単語を「聞こう」と思っていました。しかし本当は、何を伝えたいのか、どんな気持ちなのかを「聴こう」とする必要があるんだと学びました。実践してみると、少しずつ何が言いたいのか分かるようになって、うれしかったことを覚えています。

　今では毎朝男の子と話すことが楽しいです。でも、たまにこの光景を見た僕の友達がこう言います。「お前、大変なことしとるなぁ。」僕はその友達にこんな言葉を返します。

「別に特別なことはしてないよ。障害があろうがなかろうが、僕がしていることは同じ。人とのコミュニケーション、つまりしっかり話を聴いてるだけだよ。」

　僕は「障害者」と書くより「障がい者」と書く方がいいと思います。公害や災害などと同じ「害」という字が使われてないからです。障がい者は健常者にとって邪魔な存在では決してありません。障がい者だからこそ健常者に勝る部分はたくさんあります。特に、人や物を大切にする優しい心や協調する心は、僕たちが見習わなければいけないなと五年生の子どもから学びました。健常者と障がい者、お互いがお互いを認め、助け合える社会を目指したいです。